

むつごろう通信

18号

2010年

10月1日発行

着任のご挨拶



沿岸域社会計画学
桑江朝比呂客員教授

2010年4月より客員教授を拝命いたしました。私は現在、港湾空港技術研究所という土木系の独法研究所に勤務しております。大学生の時は農学部の経済学科に所属し、卒論では肉牛を肥育する農家の損益を分析しました。大学院生の時は水産学の研究室に所属し、大阪湾をフィールドとして植物プランクトンの現存量と水質との関係について研究しました。大学院修了後すぐに現在の職場に就職しましたので、経歴的にはかなり風変わりです。

就職後は干潟生態系やその再生に関する研究を続けております。例えば、造成された干潟において生態系がどのように発達していくのか、大型の干潟実験水槽（メソコスム）や現地の造成干潟で調べたり、干潟に飛来するシギ・チドリ類が何を食べているか調べたりしております（図1）。また、干潟における物質循環にも興味を持っており、酸素・炭素・窒素といった生元素のフラックスについて研究経験があります。最近では、海洋生物が固定する炭素（ブルーカーボン）に特に注目しております（図2）。沿岸生態系が果たしてどの程度CO₂を吸収し、気候変動に寄与しているのかについて明らかにしたいと思っております。

日本を代表する泥干潟を有する有明海や八

代海を研究・教育拠点とする機会をこの度与えていただき、非常にうれしく思っております（ただ実は、これまで泥干潟での調査経験がほとんどなく、あの柔らかすぎる干潟の上でまともにサンプリングができるのか正直不安です）。有明海や八代海の豊かな生態系を保全・再生するためには、どのようなことが重要なのか？といった課題に対して、沿岸域環境科学教育研究センターの皆様とともに取り組んでいきたいと思っております。常識を覆すような驚きのあるテーマや、challengingなテーマが好きです。今後ともどうぞよろしくお願いたします。



図1 干潟で餌を食べるシギ（トウネン）

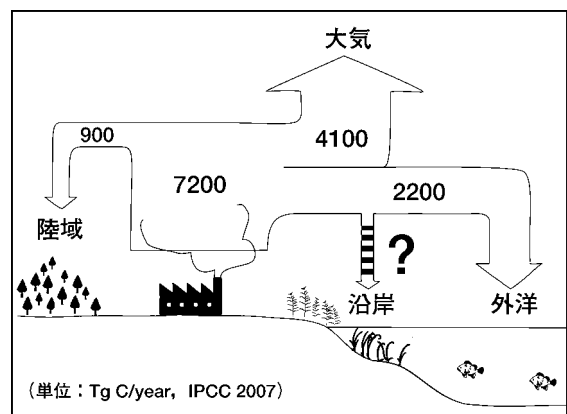


図2 沿岸生態系は炭素をどのくらい固定しているのか？

着任のご挨拶



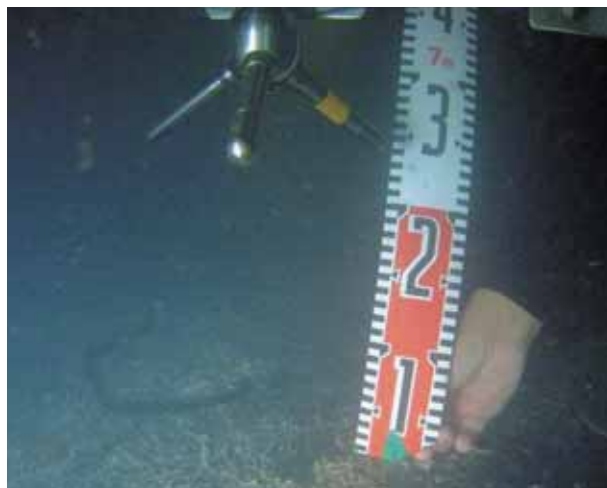
沿岸域社会計画学
中川 康之客員准教授

4月1日付けで本学の客員准教授を拝命いたしました。これまで、勤務する研究所において夏期実習生の研究指導などを通じて、学生と接してきたことはありますが、大学での職務に就くのは初めての経験となります。

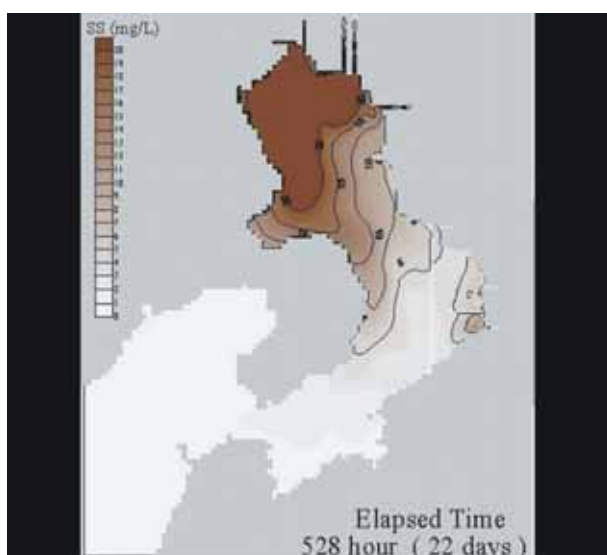
今から10数年前の話になりますが、アメリカ北東部のチェサピーク湾沿岸にある大学研究所に1年間留学していました。チェサピーク湾といえば、モニタリングを通じた環境管理が、連邦政府・地方政府をはじめとする多くの関係機関により組織的に実施されていることで有名です（きっかけは食用カキの減少による）。当時、環境改善などの目標を定めて水質規制等を実施していましたが、必ずしもすべてが目標通りにうまくいっていたわけではなく、人間活動が深く関与する自然環境の回復の難しさを感じました。一方、私が所属していた研究所でも地域の子供たちに環境教育を積極的に実施しており、また沿岸を含めた海洋学分野の大学院生への政府からの奨学金を充実させるなど、問題解決に向けた教育・人材育成面での長期的な戦略が非常に印象的でした。（帰国してから有明海を研究フィールドとして調査等を始めつつあった頃、のり不作をきっかけに有明海でも環境モニタリングの重要性が高まろうとは、何かの縁を感じます。）

さて現在取り組んでいる主な研究テーマは、内湾域の底泥輸送メカニズムの解明です。

有明海も主要な研究フィールドの一つとして、これまでも幾度か現地調査を実施し、底泥輸送のシミュレーション・モデルの開発に携わってきました。これらの経験も熊大での研究教育活動に活かしつつ、将来の有明海的环境を担うことになる学生さんたちと、新しい研究課題にチャレンジしていきたいと考えています。どうぞよろしく願いいたします。



海底泥の挙動把握のための現地調査



有明海の底泥移動シミュレーション

第11回 熊本港干潟フェスタ (リニューアル開催しました)

5月29日に、“第11回干潟フェスタ;干潟ふれあい体験・環境学習”を開催し、約700人もの参加者で大盛況でした。「学習コース」では、海の環境と災害、干潟の役割と再生についてのビデオ・アニメーション・パネル展示を行いました。「チリメンモンスター体験」と称した、チリメンジャコの中に混じっている微小生物を虫眼鏡で探すコーナーには人だかりが出来ていました。「研究コース」では、有明海や環境調査船「海輝」の模型展示や、水質調査、アサリ貝の水質浄化パワー測定、世界各地の砂の顕微鏡観察など楽しい研究体験をしてもらいました。「干潟体験コース」は、隊長先導のもと干潟の生物や泥の観察をする“探検隊”，干潟のなかを自由に遊ぶ“どろんこ隊”，干潟の泥の中を穴掘機で覗く“もぐら隊”の実体験コースで、子供たちの大きな歓声が、干潟中に響き亘っていました。

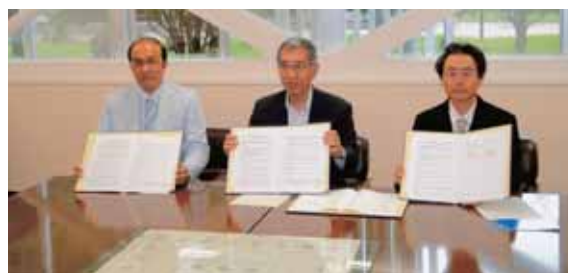


「干潟体験コース」の“探検隊”
これ何だろう！

港湾空港技術研究所と教育・ 研究連携協定を締結しました

2010年7月6日付けで、熊本大学沿岸域環境科学教育研究センターおよび大学院自然科学研究科は、独立行政法人港湾空港技術研究所と教育・研究連携協定を締結しました。

本協定の締結により、港湾空港技術研究所の研究員が、熊本大学で客員教員として研究教育の指導や、大学の学生(大学院生)が当該研究所に出向いて、より現実的な課題の勉強や研究指導を受ける事が可能となりました。さらに、熊本大学と当該研究所における最新の研究の進展や普及を促進することが可能となり、より充実した教育・研究環境が整備されました。今後、いっそうの連携が図られることが期待されます。



調印式:左から、西山 忠男:熊本大学自然科学研究科長、
金澤 寛:港湾空港技術研究所理事長、
滝川 清:熊本大学沿岸域環境科学教育研究
センター教授

実習・観察会報告 - 合津マリンステーション -

2010年7~8月に、合津マリンステーションでは以下の7つの実習を実施しました。

- (1) 熊本西高理数科実習(31名),7月6~7日.
- (2) 熊本県生物部研修会(58名),7月10~11日.
- (3) 一般公開実習(高校生対象,7名),7月17~18日.
- (4) 臨海実習 II(熊本大学理学部3年生対象,14名),8月6~10日.
- (5) 女子中高生理系進学支援事業・乙女サイエンススクール in 天草(41名),8月10~12日.
- (6) 大学公開実習(4名),8月18~24日.
- (7) キッズラボ・サイエンスキャンプ(小学生対象,38名),8月25~26日



干潟の生物の採集 (熊本西高校)

この他にも、上天草市と共催で、海蛍の夜間観察会を3回、干潟生物観察会を2回行っています。